

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 葛西 敬之

本論文は、スイスの作家ローベルト・ヴァルザーの作品群を「散歩」という主題をもとに論じ、そのうえでヴァルザーの著作行為を貫く詩学を統一的に再構成する試みである。散歩ないし逍遥や低徊は、思索や想念を触発するものとして、古代以来哲学や文芸における伝統的なトposであったが、本論文においては、こうした「散歩」の担った意味や役割の歴史的変容が概観された上で、近代、とりわけ19世紀後半以降の新たな社会的・技術的条件下で実践されたヴァルザーの「散歩」が、その作品制作においていかなる意味を持ちえたかが、重層性に考察される。

第一部においては、ヴァルザーが「私」を語る際に示す韜晦や粉飾あるいは脱線が、「迂回」という彼の文学表現上の根本原則に由来するものであることが明らかにされる。物語る「私」の虚構性は、近代文芸の読解における基本的前提となっているが、本論文はそこにとどまらず、ヴァルザーの「私語り」における「迂回」を、言語の暴力性を回避するという表現者の倫理に基づいた実践であるとする。語る対象を特定の視点から枠づけ固定することのない言語、事物を所有し支配しようとするのではない言語の可能性が「散歩する私」によって模索されているというのである。「私」にまつわる記述を詳細に読み解いたうえで、「散歩」という無償かつ無目的的な行為が、事物を歪め傷つけることなく描き出す修練としての意味を帯びている、という本論文の指摘は刺激的である。

第二部においては、ヴァルザーのこうした実験的な「散歩」の言語が、近代の言語論や言語懐疑の系譜といかなる関係にあるかがまず解明される。そのうえで、言語による真実への到達可能性を一旦留保し、それを期待する状態にとどまることに書くことの幸福を感じていたという、ヴァルザーの文芸言語の特異性が、「シニフィアンの散歩」という呼称のもとで説得的に論じられている。

第三部においては、ヴァルザーの著作活動全体が広い視野から特徴づけられる。本論文は、彼の多様な作品群が、各ジャンルに固有の規範を遵守しつつも、それを問いなおし異化するような性格を持つと指摘する。そうした彼のテキストが、ジャンル間の限界を「散歩」するものである、という議論は興味深い。また、多くのフェュトンを書き残したヴァルザーが、このジャンルに「取るに足らないもの」を忘却から救出する、という集合的記憶における重要な役割を託していたという主張には、今後の議論の深化と展開が期待できる。

ヴァルザーの「散歩」的宙吊り状態への志向に倫理のみならず書くことのエロスが認められるべきではないかという指摘や、「散歩」的テキストをいかに翻訳すべきかなど、残された課題はあるが、日本における初の本格的なヴァルザー論として、本論文には高い評価を与えることができる。よって、本委員会は全員一致で、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断する。